「英語ができれば、活動のステージが変わり人生が百倍豊かになる。」

お笑い芸人
石井 てる美 さん（2002年　平岡塾 卒業）

東大大学院を修了し、外資系コンサルティング会社「マッキンゼー」に入社と、周囲から見れば順風満帆のエリート人生から、お笑い芸人に転身した石井てる美さん。「英語は、私の人生のステージを変えてくれた。一生の財産」と語る石井さんに、中高時代の学びや、これから中学に入学する子どもたちへのメッセージなどを聞きました。

「慣れるまで習え！」大量の英語に触れる平岡塾

――中高時代（白百合学園）の思い出からお聞かせください。

石井　今と変わらない元気な女の子でした。毎年、学園祭実行委員になり、最後は委員長を務め、全校生徒の前でイベントのMCをしたこともあります。勉強も手堅く頑張りながら、学校行事でも完全燃焼し、「リア充」の中高時代を過ごしました。

――小さい頃から、英語に興味があったのですか。

石井　4歳から6歳まで、カナダとアメリカで暮らしました。帰国後、特別に英語を勉強したわけではありませんが、留学経験があるので親の影響も受けて、英語にはずっと興味を持ち続けていました。中学に入学してすぐに、ESSにも入りました。

――平岡塾に通うようになったきっかけを教えてください。

石井　「かなり変わっているけれども（笑）、英語に特化した良い塾だ」という評判を聞いてきた母に勧められ、中1から通うことにしました。

――平岡塾に入って、印象はいかがでしたか。

石井　平岡塾では、文法・読解・英作の宿題が大量に課され、それを素材として、週1回、3～4時間の授業が行われます。中学時代は、宿題まで手が回らず、授業についていくのが大変でした。でも、生徒同士で教え合う雰囲気があるのが平岡塾のいいところで、お互いに分かる部分をフォローし合っていました。高校に入ってからは英語に本気で取り組むようになりました。

――それは何か理由がありますか。

石井　中3のとき、カリフォルニア州サクラメントでホームステイを体験し、英語は世界の人々とコミュニケーションを図れる最高のツールだと感じたことが転機になりました。もちろん、受験にも役立ちます。英語だけは頑張ろうと決めました。

白百合学園は、英語教育に定評があり、授業内容が充実しています。私は、学校の授業をおろそかにせず、しっかり予習・復習していました。その下地があったため、高1で本気になった後、平岡塾の宿題もこなせるようになっていきました。

――平岡塾の魅力は何でしょうか。

石井　英語力を高めるには、いつの間にか上達するような安易な道はありません。いかにコツコツと大量の英語に触れるかが勝負です。逆にいえば、地道な努力を続けさえすれば、絶対にできるようになります。平岡塾で学んでいた頃は、なぜこんなに大量の宿題を課されるのか、嫌になったこともありましたが、今振り返ると、それが血肉になっていることが分かります。

たとえば、1つの重要構文を覚えるとき、平岡塾では、少し書き換えた文を30ほど書く勉強が課されます。一般的な学校なら、構文のパターンを教えて終わりかもしれません。けれども、それで分かった気になっても、いざというときに使うことはできません。手間はかかりますが、類似した文を30も書いて、考えなくても出てくるようになるまで、体に染み込ませることが大切なのです。こうして覚えた例文は、一生忘れることがありません。平岡塾のモットーである「慣れるまで習え」の威力を感じています。

平岡塾独自のセレクトによる教材の数々。古典的名著を読み解くなかからアカデミックな英語を学ぶ

ネイティブ講師による読解レッスンが毎回35～40分間あり、1～3回で読みきる随想・論説・小説等（難易度はセンター試験レベル）から始めて、高校ではデカルトDiscourse on the Methodやラッセル On Education の原書も取り上げる

東大の試験会場にノートを「お守り」代わりに持参

――大量の英語に触れたことが自信になりましたか。

石井　ええ。東大入試のときも、「この教室の中に、私より英語を勉強した人はいないだろうから、絶対大丈夫」と自信を持つことができました。試験会場には、「お守り」代わりに、平岡塾で使ったノートを持参しました。授業では、ラッセル、デカルトなど、正統派の英語を素材にするのですが、その英文をコピーして貼って、自分で和訳や読解のポイントを書き込んだノートです。試験直前までそれを見直すことで、心を落ち着けることができました。

――東大時代の思い出もお聞かせください。

石井　文科三類に入学しましたが、進学振り分け（3年次に所属学部を決めること）の際、工学部に社会基盤学科国際プロジェクトコースが新設され、文系学生も受け入れることを知りました。「国際社会で活躍できるのは、イチローと浜崎あゆみだけではありません」がキャッチフレーズでした。なぜこの二人なのだろうと思いつつも（笑）、在学中から、海外にフィールド調査に出かけ、英語を使って現地の人々と交流できるプログラム内容に魅力を感じました。私にぴったりだと思ったのです。実際に、3年次はタイ、4年次はデンマークでフィールド調査を行い、修士課程1年次では、フィリピンのアジア開発銀行で半年間インターンシップを体験しました。その経験を生かして、国際的な舞台で仕事がしたいという思いが強まり、大学院修了後は、外資系コンサルティング会社「マッキンゼー」に入社しました。

「マッキンゼー」からお笑い芸人の世界へ

――順風満帆に見えますが、なぜお笑い芸人をめざそうと思われたのですか。

石井　確かに、東大からマッキンゼーと、経歴だけ見たら順調だったかもしれません。ところが、次第に高く評価されないと生き残れないというプレッシャーに潰され、難しい仕事を前に精神的に追い詰められてしまいました。同時に「いい大学、いい会社」という世の中の評価基準に則って選択をしていた自分の人生への違和感もはっきりしてきました。そこでやっと、人生は一度しか無いからやりたかったことに挑戦しようと思えたのです。もともと高校時代に学園祭実行委員長を務め、友達に喜んでもらう快感に目覚め、エンターテインメントの世界へのあこがれの気持ちがありました。そこで、人に何といわれようと、「しない後悔よりも、する後悔の方がいい」と覚悟を決めて、お笑い芸人の世界に飛び込むことにしました。

――最近の主な仕事を紹介してください。

石井　今年7～9月に放映されたNHKEテレの『おとなの基礎英語』に出演しました（来年1～3月に再放送予定）。私にとっては完全なドリームジョブでした。オーストラリアロケで、シドニーのハーバーブリッジを見ながら、好きな英語が仕事につながった感慨に浸り、これまでのすべてが報われた気がしました。また、お笑い番組にもレギュラーで出演しています。

――最後に、これから中学に入学する子どもたちへのメッセージをお願いします。

石井　ぜひ英語だけは頑張って勉強してください。大人になってから習得するのは大変で、まだ脳が柔軟な中高時代に努力することが大切です。英語ができるようになれば、活動のステージが変わり、人生が百倍豊かになります。東大に入学できたこと、世界中に友人ができたこと、『おとなの基礎英語』の仕事がもらえたこと、すべて英語のおかげです。私にとっては、英語を身につけたことは、ダイヤのアクセサリーよりも価値の高い、一生の財産になっています。

石井 てる美 ● *Terumi Ishii*
1983年東京生まれ。2002年、東京大学文科三類に入学。同大学工学部卒業、同大学院終了後、2008年、新卒でマッキンゼー・アンド・カンパニーに入社。同社を退社後、2009年、ワタナベエンターテイメントに所属。現在はお笑い芸人として活躍中。著書に『私がマッキンゼーを辞めた理由―自分の人生を切り拓く決断力―』（角川書店）がある

2016年10月21日付「日経マガジン エデュケーション　広告特集」掲載の内容を転載しています。※禁転載複写